

民間福祉の理念と仏教

— 社会福祉法人春風会の実践 —

志田利

〈はじめに〉

民間社会福祉事業の中枢をになう社会福祉法人の存在意義が問はれる今日、その事業展開にあたりたしかな理念を有しているかどうかが大変なポイントになるのではないか。それも宗教的信念のうらうちされたものであることが大切になる。それも日本の長い歴史をささえてきた仏教の教えを基本においているとき、利用者や国民の安心と信頼をえることに最も近い道になるのでは、とつねづね考えさせられている一人である。

介護保険法誕生とともに福祉サービス提供体の多様化、特に在宅部門での企業の算入がみとめられ、介護ビジネスの名が用いられるほどとなる。社会福祉法人はその提供体の一員にすぎない立場においこまれる。しかもその領域がせままる方向ともみうけられるこのころである。市民からみて社会福祉法人がどう認識されているかど

う評価されているか同じ在宅サービスを利用するとき、ここは社会福祉法人だからお願いしようと言ってもらえる存在か、なのである。

法律で定められ、財源が保障されている福祉サービスの提供のみに終始している社会福祉法人であれば、それはたしかな存在感をもって市民の眼にうつることは難しいのではないか。

公が提供できる以上の質の高いサービスが提供されているか。法律をこえた先駆的なサービスの提供を試みているか、などが選ばれた事業体たりうる条件ではないか。なによりもまず、しっかりと理念、己の利のためではなく利用者のために献身努力する姿勢がみうけられるか、なのではないか、すくなくとも企業にはできないサービスを提供するためきちんと目標をもつてとりあげ努めているか、という点が信頼をえられるかどうかのわかれ目になるように思うのである。この考え方に立つてみるとき数多くの社会福祉法人の

なかでキラリと光るものをもってひきつけられる存在が目につくのである。ここに筆者も面識がある創業者を有する法人をとりあげ、光る所以をさぐってみたい。普遍化できるものをもとめてみたい。

その法人は静岡県沼津市に本部をおく社会福祉法人春風会であり、創業者は現理事長の石川三義氏の父である石川春男氏。いま法人最初の施設あしたかホームの玄関に胸像となつて法人の発展をみまもっている。だれにも春風のようにやさしく接する温和な人柄がよく表現されている像である。車イスの利用者が親しみをこめてみあげている風景をみて、まだこの地にあつて創業の志をつたえるべくつとめておられるのだ、と感じさせられるのである。

〈石川春男氏のプロフィール〉

社会福祉法人春風会の創業者石川春男氏（生前石川さんとおよびしていたよしみで以後石川さんとさせていただく）は、大正八年一月三日、沼津市の旧家石川家に生れる。石川家は江戸時代にさかのぼることのできる旧家で法華宗本門流青野山妙泉寺（一五〇一年開創）の檀家であり、石川さんも信仰の人であつた。沼津農高卒業後兵役に従事、戦傷をうけ三年後に復員され、その後製茶工場経営そして自動車部品製造の芝原製作所を創業、現在も百人の従業員を擁する優良企業で娘夫妻が経営にあたっている。その石川さんが意を決し福祉の道にすすみ、特別養護老人ホーム（当時沼津市にはなかつた施設）の建設を志し私財を投じてあしたかホームを実現、つづ

けて在宅福祉サービスの数々を全国でも先駆けて着手、学童保育にとりくんだ時は「こどもが帰ってくる老人ホーム」とマスコミにとりあげられるなど話題の提供者でもあつた。平成九年七月二十二日永眠されるまで多彩な老人福祉事業のとりくみは県内業界のリーダー的活動と高い評価をうけるのである。そのはたらきに魅せられて研究職にあつた長男三義氏も途中から参加、今なおホームの重鎮として日夜献身される小野十一氏など有為な人材が応援協力するといふ石川さんのすぐれた信念と実践と感化力もまた特筆されるものである。一日も休みをとらなかつたという石川さんのあゆみをさぐつてみたい。

〈福祉への道の原点〉

なぜ順調な企業の経営者が福祉の道にすすむことになつたのか。

①親孝行の思いが原点

法人二十周年記念誌に石川^{（存）}さんは次のように表現している。

「なぜこの事業に入ったか、それは両親をみ送つた経験をもつが、終末期に満足した旅立ちであつただろうかというおもしろいものからだ。設立してまもない会社の仕事が忙しく、日中床に伏す親のこし会社に出かける私の心情は、いいようのない淋しいものがあった。同時に社会にはこのような思いをしている人も大勢いるのではないかと推察したのである。予測される高齢社会になれば、私と同じ思いをされる人々や、虚弱な親をかかえ窮地に追いこまれる

人々も多数発生してくることを思いながら、茶畑の丘陵に立った時、渾然と湧き出てきた目標は『社会の老人を看とる』ということであり、このことは尽せなかつた両親への供養でもある、と考えたのである。」なるほど親への孝心のあらわれとしての行いだつたのか、とうかがうのであるが、もつとなにかあるのではないか、理事長三義氏が次のように記されている。

②入院の体験がある

法人広報誌「はるかぜ」18号（注）に現理事長が次のように表現しておられる。

「初代理事長の法人設立の経緯についてのべておきます。初代理事長は、五十四才の時仕事中の事故で脊髄損傷による下半身麻痺となり、半年間に及ぶねたきりの状態の生活とリハビリ入院の経験をされました。その入院時に医療施設での高齢者の社会的入院の実態と沼津市における高齢者福祉施設の未整備の問題を知るにおよんで、これまでの実業界から身を引き、退院後の自らの残された人生を社会福祉事業に捧げることを決意され、私財を投じて高齢者福祉施設を建設されたのであります。」と。さらにつづけて

「初代理事長が私利私欲を捨て去り社会福祉事業にとりくまれ、二十二年間にわたり三百六十五日休むことなく施設長として献身的に福祉の現場に立ち続け、垂範されたことは忘れることはできません。」と記しておられる。

ここで石川さんのおもいの深さがうかがわれ創業の志にふれるお

もいがしてくる。筆者がかつて県庁に在職時にみえたとき、眼を細め「親と一緒にいるようなもの、おとしよりの生活はなんとも楽しいもの」と語っておられたことを想い出すのである。

〈法華の信仰〉

このおもいや体験に加えて石川さんの信仰心の深さもうかがわれるのである。菩提寺である妙泉寺原井慈鳳住職からうかがったことである。

「石川一族は江戸時代以来沼津市推路地区の名家。この地は頼朝がよく眷狩をし軍馬の養成にあたったところであり交通の要路でもあった。石川さんは信仰のあついでよく寺のお世話もなされた。特に福祉の事業にとりくもうかと考えておられたときはしばしば足をこばれ話しこんでいかれた。いよいよ決心されるときに「戒名をいただきたい」と申し出られた。死んだおもいでこの事業にとりくむ強い志を示されたのだつた。よく考えてみられてはと申しあげたが、その志の固さを感じ、法華の教えにもそうものがあると考え承諾し、戒名のなかに志を入れてその上に男と加えてあげ無料で供したことをおぼえている。きつと時代の先をみていた、高令社会の到来を考えておられた。当時あちこちでつくられていた保育所ではなく老人ホームであるところは先見性のあるころみであらう。」と。そして法人の名称を春風会とされることもうかがい、大変なきびしい寒風のもとでも春のこない冬はない、忍耐していけば春風が

吹き芽がでてくる、と語られたとつけ加えられた。いのちの大事さ、それを手をあわせておがむ心がこの名にあらわれている、とべられた。

〈人間的な魅力と協力者〉

石川さんには不思議な人間的魅力がある方だった、とはつながりのあつた方の等しく評されることである。筆者が県庁で福祉法人等の担当をしていたときの体験である。来客者の多くはまず部課長の所存をたしかめあいさつをしそのあと担当のところで用件を話すという場合が多い。石川さんは違っていた。まず担当のところで用件を語りそのあとから上の方に席を移動する。この姿勢は多くの方の好感をもつてうけとめられたと考えられる。担当の者にも仕事を展開するうえでの問題点や考え方を率直に語り助言をもとめたしかなものにしていく熱心さは、まさに私利利欲をこえた方だ、本当に福祉の道に献身される方であるなあとまわりの人々を共感させ、なんとかお手伝いしなければ、という雰囲気をつくってしまう珍らしい方であつた。当時県庁で要職にあつた小泉森作氏は退職の時期をむかえるやこの石川さんの考え方に共鳴され一緒にホームの運営にあたり、泊りこみでおとしよりのお世話に日夜献身されるのである。そして小野十一氏がおられる。今なおホームの柱として活躍しておられるが、この小野さんも石川さんの魅力にほれこんだ方である。長く自衛隊につとめられ富士学校の要職にあるとき、自らの将来の

ことも考え、教え子達が多く勤務していた身体障害者の総合施設あしたか太陽の丘を訪ねられる。その時近くに老人ホームがあると聞き足をのばし、訪問され石川さんにおあいする、お人柄にほれこむその出会い、そしてホームにかざられていた園訓をみて、これだここそ自分の力を発揮できる職場だと心に決め、石川さんにぜひにとお願ひしたと語られる。別添のとおり園訓は今日においても輝くものでありあたたかい心があふれている。小野氏はこのなかで和を愛す、明朗で礼節を、とあげられとくに地域福祉のためにのことばが胸にひびいた、と語られる。石川さんのお人柄、そのあらわれとしての園訓、小野氏の心をひきつけた力であつた。

昭和五年生れの小野氏、今も自宅の御殿場から車で一時間余の道を朝早く走らせ七時にはもうホームに入って働いている。おとしよりに声をかけ食事の介助にも職員と共に行動している。一日も休まない。これは石川さんのやり方をまねているだけだ、と笑っておられる。石川さんは朝昼晩とホームをまわりおとしよりに声をかけ職員をねぎらう。出張しても必ず帰ってこられる。ある年正月に一寸つかれたので二時間ばかり休ませてくれ、といって早く帰られたのをおぼえているぐらい休むことを知らなかったと。遠くに出張して帰ってくるときは全職員にお土産をかかえてきてくばられる気づかひだった。この石川さんのやり方を小野氏は忠実に実行しているだけだ、と語られる。現理事長三義氏もまたこのやり方を大事に学びとっておられる。このように石川さんの実践が多くの人々を感動さ

せひきよせ協力者にかえていきたしかな協力の輪の中で事業を展開してきたのである。

〈五ヶ条の園訓〉

小野氏がひきつけられたという園訓を次にあげてみたい。昭和五十一年の作である。^(註3)

社会福祉法人春風会 園訓

- 一、明朗で礼節あるホームに育てましょう
- 一、和を愛す施設の主旨を理解し知識の向上に努めましょう
- 一、毎日の仕事に責任と誇りを持って楽しく勤めましょう
- 一、老人の身になって我が身に対処しましょう

以上、五ヶ条の園訓は現在も法人内各施設に大事に掲げられ復誦されているのである。小野氏のおもいでにある石川さんのくちぐせは「地域のためになることをとりくめばだまっても金はついてくるものだ」ということばだった。小野氏は石川さんのまねだとあげられるその一つはホームで亡くなった方にお経をあげているがこれは好評で心がつながるのかおとしよりの願いで行事のあるときはお経をあげる、そのために何度もテープで独習を重ねていると笑う。この豊かな心のつながりが見事に活かされている。小野氏は重ねる「石川さんは職員を叱りつけたことがない、良いところをみつけてはほめることはおしまなかった」と。地元市の関係職員などに

も冠婚葬祭などのときには心づけを忘れなかった、という行いが地域の協力者やボランティアとのかかわりにもひろがっていたのである。人との出会いを大切に作る心くばりの立派さである。

〈基本の理念〉

石川さんのあついおもいそして利用者本位のたしかな実践が法人のなかに強い指針として根づいていることは、小野氏の園訓礼讃のことばにあらわれている。現理事長三義氏も法人広報誌に次のように表現し職員によびかけている。

「初代理事長が常に私たちに話されたことのなかに『福祉は常に現場にあり』『老人のこころのリハビリが大切である』『老人に生きる希望と喜びが生まれる処遇を』『サービスを受ける人間の立場に立つて、人間愛の精神で活動され、奉仕の精神を持って初めて福祉という困難な仕事達成に近づいていくのではないか』という言葉が思いだされます。そこには、福祉への篤い思いや情熱が語られています。」と。

さらに法人の基本理念として次のようにつつけて語っておられる。

「法人設立当初に作られた法人の園訓には、法人の基本理念が示されています。」

『お年寄りの身になってわが身に対処すること』『地域福祉の推進をすること』『明朗で礼節ある施設であること』『介護の仕事に責任

と誇りをもつこと』などは、三十年後の現在も法人運営の基本方針として継承されています。」と。そして法人のはたすべき基本的使命と役割をしっかりとらえ、法人創立者の福祉への篤い情熱と理念を受け継いでいきましょう。とよびかけておられる。この考え方がホームにかかわる職員一人ひとりに周知徹底していることを示すのが小野氏の言葉である。

「大変きつい仕事なのにこのホームの職員はやめない。みんな勤続年数が長いのが不思議なぐらいです。みんな生き生きと利用者の相手をし汗を流すことをおしまない。家庭の事情などで退職した職員も都合つく時間帯をボランティアとしてホームにかかわることを喜びとしている。初代理事長と一緒に働いた経験をもつ職員が行動をとおしてその考え方を次の世代につたえているのを見ると初代理事長がまだホームのなかで生きているのだと思いしらすされるのです。」小野氏「自身が三六五日休むことなくホームのなかで役割をはたしておられるのである。石川さんのお人柄を直接共労した体験をとおして知しておられる人々が今法人全体の注目される日々の実践を身をもってつみ重ねておられる。亡くなられて八年、なお石川さんは生きておられる。そう思わされた次第である。この石川さんの生涯をかけてのおとしより本位の考え方とおこないが、そのまま法人の運営の理念として大事にされ、職員の実践のなかで生きていく。その原点にあるものは先祖代々法華の教えを大事にしてこられた信仰心だったのではないか、こう思われる。

大事をむかえたとき寺にお上人を訪ねる、そして在家信者としての石川さんの福祉につくされた見事なあゆみは筆者の表現をこえる価値があるものと高く評価したい。生前のこやかな大人の風格をおもいうかべながら感じているところである。

〈後継者三義氏〉

そして現理事長三義氏である。大学研究室から初代理事長のとりくみを応援していたのがいつのまにかどっぷり法人の事業展開にかかわるようになる。石川さんの最も志を継承すべき大事な役割になう立場に徹することとなる。現在介護保険法にとりあげられている在宅サービスのほとんどを先駆的にとりくむときにも三義氏の献身があった。その実績を評価されて日本生命財団の助成をうけての「沼津市在宅要援護老人地域ケア事業」にとりくむ時も三義氏のはたらきが大きかった。高齢社会の到来が予測される昭和六十二年に市内の関係機関との協力のもと在宅のおとしよりのケアネットワークづくりにとりくまれた。共通の老人台帳づくりもふくめサービスの横のつながりと重複しないしくみづくりをみごとに成功させる。全国から見学者がみえる成果でありなにより市民の高い評価をあげるのである。キーステーションとなつたあしたかホームは静岡県東部の老人福祉活動のメッカと評されるまでになる。その活動の中心におられた三義氏の存在感は高まる一方であった。この実践が静岡新聞連載「ほげに挑む」^(注)にその活動の中心として報じられ若き

三義氏の写真が毎日によりあげられている。さらには伊豆の町村からぜひにと懇請され受託運営することになった特別養護老人ホームぬくもりの里には平成十一年に天皇皇后両陛下の行幸啓をいただくこととなり先頭に立つて案内する三義氏の英姿は全国に報道されている。このように石川さんの右腕として立派なささえ役をはたすとともに平成九年八月二代目理事長として就任されるや初代に学んでの法人運営につとめられ見事に継承、さらなる発展の道をあゆまれる。後継者の範である。

〈福祉法人の本質〉

最新の法人パンフには「さわやかな風のように心に届く福祉―春風会」と表紙に宣言し、法人の理念を次のように表現しておられる。「私たち春風会は、社会福祉法人の公益性、公共性という法人の本質を遵守し、高齢者、障害児者の人権の擁護、利用者本位のサービスの実現、福祉施設を拠点とした地域福祉の推進、予防的福祉の実践、青少年の福祉教育の推進などに努め、今後も福祉サービスの中心的役割を果たして、地域住民と行政の信頼と期待に応えていきます。」立派な理念であり、そのいずれの項目も具体的に実践のうらうちのあるものであるところに重味があふれていると感じさせられる。社会福祉法人としてののぞましい姿勢を評価したい。特に施設を拠点とした地域福祉をあげておられるのはすばらしい。法に定められた財源のうらづけのある事業のみに終始している社会福祉

法人に他山の石としてみつめていただきたい考え方であると申しあげたい。

さらに理事長としてのあいさつに法人の現況を要をえて表現されているのでつづけてそのままあげさせていただく。

「社会福祉法人春風会は、昭和51年8月、初代理事長石川春男氏によつて設立され、昭和52年4月、沼津市受鷹に特別養護老人ホームあしたかホームを開設しました。以来ショートステイをはじめとする様々な在宅福祉事業を次々と展開してきました。在宅介護支援センターは全国に先がけて活動し、早くから介護セミナーや小中高大學生への福祉教育を実践し、高齢者福祉の向上と青少年の人格形成に力を注いでまいりました。

平成6年と7年には田方6町（現伊豆市、伊豆の国市）の支援により、伊豆市修善寺に伊豆中央ケアセンター、伊豆の国市大仁にぬくもりの里、平成16年には沼津市の支援によりみはるの丘浮島の特別養護老人ホームをそれぞれ開設しました。この間、特養施設を核として、伊豆市中伊豆、天城湯ヶ島にデイサービスセンターの開所、沼津市原高齢者福祉センター事業の受託など、沼津市と伊豆田方地区で数多くの福祉事業を誠意をもって推進しています。

また、平成4年沼津市志下に重度障害児者生活訓練ホーム沼津虹の家、平成9年に大仁町田方福祉村内に知的障害者デイサービスセンターあおばの家、の各障害者施設を開所し、平成14年には救護施設沼津市立高尾園の事業受託と各種福祉事業の充実にも努めています。

す。21世紀を迎えて私たち春風会は先人の創業の精神と遺徳を継承し、社会福祉法人の公共性と公益性という使命と責任をもち、真の福祉の姿と高齢者や障害ある人の真の幸せを求めて、今後も福祉の新しい流れを創造してまいります。」

三義氏は先代ゆずりの温和さを秘めた長身の美男子ぶりで地域の多くの人々の信頼をあつめている。地元沼津市教育委員長を長くつとめるほか、県ソーシャルワーカー協会や県社会福祉士会の役員、県介護支援専門員協議会長などの多くの要職をも熱意をこめてこなしておられる。石川さんにとりこれ以上のあとつぎはないのでありきつと喜んでおられるはずである。石川さんの創業の精神を見事に継承されている三義氏、そのまわりを多くの人材がかためている姿をみるとき、社会福祉法人としてののぞましい発展を示す範となる実践例をみせていただくおもいがするのである。三義氏が三浦文夫氏らとの共著「介護保険施設の経営戦略」^(注)のなかで、介護の仕事は一般企業の物づくりや製品の販売と異なり、五感を通じて考え、日々の思いを抱いている人間をお世話することである。介護にあたる職員一人ひとりに、人間的豊かさや敬愛の心が備わっていないければならない、とのべ、次のように主張しておられる。

「老人福祉施設と在宅福祉サービスが、一般の営利企業やほかの事業所との競合のなかから選ばれていくためには、介護技術の質の管理だけでなく、福祉職員がこれまで先人が何十年にもわたり培ってきた介護の心、心のケアを今以上に構築していかなければならな

い、といえる。営利の視点に立ち、介護技術のレベルだけを考えている限り、心のケアには限界があるであろう。福祉の専門職は、まさにこの心のケアをしつかり身につけ、一般企業との差異化を図っていかなければならない。

心のケアこそ福祉施設、福祉職員の使命であるといえる。利用者本位の経営を実践してこそ、その法人が地域から評価され、信頼される存在となり、安定的経営と事業の継続拡大が可能になると考えられる。介護保険制度の導入に伴い、在宅福祉分野を中心に民間企業が積極的に参入してきているが、そのなかで社会福祉法人が利益や営利という視点で動いてしまったら、福祉本来の使命が失われる危険がある。介護保険になっても福祉は福祉であり、社会福祉法人の使命と役割は基本的に変えるべきではないといえる。営利を追求する民間企業が参入する時代こそ社会福祉法人は公共性、公益性という法人の本質を遵守し、国民の福祉の向上のためにこそ真価を発揮していかなければならないと考える。21世紀は社会福祉法人の本来の使命が問われる時代であり、社会福祉法人に対する国民の信頼と期待が高まる時代であると思われる。私たち社会福祉法人は、規制緩和の時代に社会福祉法人に寄せる国民の信頼と期待に的確に応えていかなければならないだろう。」まことに堂々たる信念の披瀝である。県域をこえてまさに日本の福祉法人のリーダーとも称される立派な企業ではなしえない国民のための福祉サービスの展開につながり、

社会福祉法人が国民に支持される存在になるのではないかと考えさせられる。石川さんの在家信者としての奇特なおこないが次の世代に見事な花を咲かせてさらに根をひろげようとしているとみうけられるのである。

〈春風会の先駆的とりくみ〉

1、福祉教育―子どもが帰ってくる老人ホーム

このころはあげて福祉教育の大事さがあげられる。そのはるか先のとくに石川さんは次の世代と老人世代との交流、共通体験をもたらす福祉教育にホームという場を開放してとりくんだことは先駆性を示す大事なとりくみであると評価したい。開園十周年式典で次のようにのべておられる。^{注6}

「ホームを訪れる学生諸君は『老人は怖いもの』というイメージをもっている。一方在宅家庭では、親の扶養にあたる意思はあるもののねたきりの親の枕元までいくと立ちすくみ手を出せない嫁の話がきかれる。青少年や地域の方に施設を開放し、ホームの高齢者から実感として学びとり自らの生き方に生かしてほしいと願っています。地域の方が豊かに生活していくための共有財産という位置づけをしております。ホームで学んだ介護のノウハウを在宅福祉に活かしていただきたい。学生の宿泊研修所設置もこのねらいからです。」実際には昭和58年の夏休みから実施しているもので地域の学校と連携を重ね、まず小学四年生から六年生を一泊二日で受け入れ

る。ある日の日課である。第一日目は集合時間を十四時として宿泊準備をし夕食の炊はんを行い中庭で喫食、その後おとしよりの夕食介助手伝い、配膳、退膳、そしておとしよりの話しあい、お手伝いが一段落したところで入浴、夏休みの勉強会、友達との語りあい、二十一時就寝、という日課をこなす。第二日目は六時に起床、おとしよりの洗面の手伝い、朝食の配膳、退膳、居室内の清掃、昼食作りの手伝い、おとしよりの話しあい、夏休み勉強会、陶芸づくり、中庭での球技とつづき十五時まで、この間子供の笑い声、足音がひびきおとしよりは笑顔をうかべ満足そうだった。おとしよりにありがとうとの言葉をかけられている子供もいるという風景である。当時の新聞も「生徒の心（心）に大きな衝撃をうける貴重な体験であり、生徒たちは来る前のイメージと違い老人たちから心あたたまるものを得られて良かったと感想をのべている」と好意的である。感想文には次のような言葉がみられる。

- ◎有難とうという言葉の重さを知った
- ◎祖父母や両親を大切にしなければと思った
- ◎人の心のあたたかさを知った
- ◎おとしよりの日常生活を知ることができた

この活動が地域の子供の学童保育につながり、カギツ子になりがちな子供をホームに帰ってきて両親が仕事をすませますまであずかる。子供達は宿題をやったりおとしよりと話しをしたりして下さす。「こどもが帰ってくる老人ホーム」と全国放送されるまでにいくの

である。

その後、県社会福祉協議会と県ボランティア協会が企画したサマ―シヨートボランティアも積極的に行うに、関係者からも密度の濃い企画で子供達を感動させてくれると好評をえている。福祉教育の先進的とりくみである。

2、老人介護相談ひだまり電話事業

春風会独自の地域交流事業として特長のある「ひだまり電話」事業。介護者の悩みごとに相談に応ずる老人よろづ相談である。

一九八三年二月の創設であり、一九九〇年から実施する在宅介護支援センターの先取り事業である。「おとしよりのお世話で、心身ともにつかれはてている家庭の人々に少しでも助言や相談相手にならないものか」こんな発想から発足した地域貢献活動である。

二十四時間体制で、指導員、介護職員、看護師などが相談に応じ、家族の要望によつては家庭訪問をして介護のアドバイスを行ったのである。例えば昭和62年度の報告書には二一九件の相談、失禁、オムツ、排便など痴呆に関連しているものが多い、と記されている。家族介護者がノイローゼの状態にあるものが多く、心のゆとりをもつていただくための相談につとめている。

〈事例〉①

嫁にきて半年、祖母を介護しているが、食事した二、三分後、まだ食事をしていないという。今たべたでしょ、というとなだめさせる

のが惜しいのか、私を殺す気が、といつて嫌やいな目で睨む。トイレに行く間にもう終っている。私どうしたらよいか判らない、と感きわまつて泣きだす。訪問してアドバイスをしてやつと介護のコツが判つたと明るい笑顔がもどつてきた。民生委員の存在すら知らず悩みのなかにとじこもる例もある。

〈事例〉②

主人が倒れて二三年介護している。最近ねたきりの状態だがベッドからフトンを落して困る。家から電話をかけると、どこかにやれるのではないかと想像して落ちつかなくなるので公衆電話からかけている。とおろおろ声。さっそくお宅をたずね助言。そしてヘルパーの派遣とつないでいる。

〈事例〉③

昼間はウトウトしている。夜は五分毎に起すので介護つかれで一週間ねこんでしまった。子供は受験勉強にさしつかえる、と困っている。便秘のため月二回スプーンで便をかじり出している。主人にも会社を休んでもらい手つだつてもらうがなかなかである。ホームの体験をつたえシヨートステイなどのサービスをつなぐことでつきれきつた介護者の応援につとめている。

こうした記録が報告書のなかで丁寧にのこされており法人のとりくみの姿勢がうかがわれる。

3、在宅介護訪問指導

予防的福祉の実践としての在宅介護訪問指導は、一九七七年、あしたかホーム開所まもなくとりくんだ事業である。月曜日から金曜日まで毎日介護職員が保健師OBの協力をえて在宅ねたきり高齢者や虚弱高齢者の家を訪問して介護相談に応じている。当時特別養護老人ホームの職員が地域の在宅高齢者を訪問助言する例は全国的にも珍らしく先駆的な特色ある事業。出前福祉の範として評価されるのである。一九九〇年ホームヘルパーの派遣事業が委託されるまで継続して実施、別にあげた種々の在宅サービスと連動して、国の事業にない先行的在宅福祉に発展させている法人のとりくみは評価されてよい。老人ホームと聞いただけで養老院という暗い感じをもつてしまう人の多い時代のとりくみである。心身ともにつかれはてながら格式を重んじ世間態を気にしている家庭が多かったときの労の多いしかし成果のたしかなとりくみといえる。

訪問地域も所在する沼津市をこえて三島市、裾野市、清水町とひろがりをもせ介護者の精神安定に貢献していく。年間五〇〇件をこえる訪問、なかにはねたきり老人の枕元に昼食一式を準備し、家族は仕事に出払っている家庭、排尿、排泄はたれ流しの状態の家庭、ひとり孤立して不自由な生活をしている例などが介護日誌のなかに記されている。施設に入所できた老人と在宅老人の差を少しでも解消しなければと考え、在宅訪問専用車両を購入して計画的にサービスにつとめてきている。

訪問指導の主なものを記録によれば

- ① 介護相談—機器の扱い方と使い方、介護法
- ② 心理的相談—介護にあたる要領、老人のペースにあわせ残存機能を上手に発揮できるように柔軟性ある介護
- ③ 清拭相談—陰部やじよくその出来そうな所の処置のやり方
- ④ 器具相談—尿器、命づなの使い方、オムツの交換要領等 などがあげられている。

4、老人介護技術研修

老人介護技術研修セミナーを地域の婦人を主対象に実施したのが一九八三年である。

ひだまり電話の相談内容やショートステイ利用の家族の話から、在宅で介護方法がわからず大変なおもいをしていことがわかる。

ホーム入所者百名のうち八十名が女性であることから老後問題は女性問題である、との認識からとりくんだ事業である。

午前十時から午後三時まで全十回のコースで受講料は無料。まず沼津市民生委員協議会婦人部や地域婦人会の役員の方が受講、次第に地域の婦人へとひろがり、平成十一年度には二級ヘルパーの養成事業に発展していく、修了者は地域の介護マンパワーとして活躍しているのである。家庭の安全ネットにそして地域の相互扶助の一助になることを願つてのとりくみである。一回三人から五人、職員と一緒にの実習と講義が内容となっている。

〈受講者の感想〉

「あしたかホームを最初に訪ねた時、私は説明のつかない大きな衝動を感じ、立ちつくしてしまいました。正直にいつてその場の雰囲気、に圧倒されてしまったのです。すべての老人が皆均一の顔をもった物体のようにさえ思わされて当惑し、自分の非力さを実感させられました。けれどもセミナーを受講するなかで私の先人感のまちがいに気づくのにそれ程時間はかかりませんでした。緊張と不安でいっぱい私の私を励まし力づけてくれたのは老人当の彼らだったのです。

『大変だね、ごくろうさま』『どうもありがとう』と声をかけられる度に勇気づけられました。そして言葉を使わずして自らのことを語りかけてくるのに気づきました。老いてなおたしかな個性と人格をもっていることを知り、彼らの存在の愛し尊重すべきだと感じました。特に食事、入浴、オムツ介助が印象にのこりました。大変な重労働であるのに加え慣れない難しさもありました。が心をこめてお世話すれば通じるのだと思いました。こんな大変な労働に耐え笑顔で介護にあたる寮母さん達の姿に教えられました。彼女たちの老人に対する心の広さや根気の強さに感動させられました。」

介護に対する見方、考え方が大きく変わり自分も心にゆとりをもつて介護にあたろうとするおもいにつつまれる。これが普通の感想である。地域の人々にどれほど大きな教育効果もたらされたか、石川さんの地域の共有財産という考え方のあらわれの一つである。

このセミナーがさらに発展して特別養護老人ホーム寮母等の痴呆性老人処遇に関する実践研修を実施することになる。研修期間は四週間、定員三名。さらには家庭奉仕員痴呆老人接遇研修会へと発展、福祉教育から現場職員の現任訓練へとおしみなく地域に開放している法人のあり方はみごとである。

5、痴呆性老人生活指導ホーム

法人として独自にとりくんだ事業に痴呆性老人生活指導ホームがある。一九八五年開始の事業。一九八〇年からショートステイを専用居室を設け実施するなかで、介護に困難な痴呆性の高齢者が目立つようになる。ホームの生活になれるにしたがい問題行動が改善されるケースをみて、痴呆性高齢者のための生活指導ホームを独自に開発、実施したのである。具体的には在宅の痴呆性高齢者を専用居室で三週間預り、その間に寮母や指導員が日常介護を通して生活指導を行うとともに精神科医の判定をうけその高齢者にあつた介護方法を見出し家族への介護教育をし介護者の負担軽減と痴呆の改善を図るものである。被害妄想、徘徊、夜間せん妄、失禁、放尿といったさまざまな症状が改善されたと評価をうけている。定員は四名、やてで県単の補助をうけられるようになり一日一、八五〇円で預る。問題は退園後のアフターケア、各種のサービス提供機関と連絡し状況の把握をつとめている。日常の生活のすすめ方は最初の四、五日間は生活の観察期間、二週目頃から生活習慣動作に応じた生活

日課を定め生活の習慣化を助長、無理のない範囲で長所に触れ生き甲斐をもたせ日常の動作につないでいく。担当者がどうしてこうも変わるのかと驚くほどの成果をあげている。利用者本位で最後まで人間としての尊厳を失わないようにしよう、との法人の対応の心くばりが成果の背景にあるとうかがわれる。

〈利用者の感想〉

「やさしい暖い笑顔と言葉に迎えられる別世界に入った不思議な気持ちでした。父の痴呆がすすみ母と私は苦しみました。仕事をもつため母には非常な苦勞をかけました。最後まで家ですごしてもらいたいとの気持ちからわらにすがるおもいでホームに参りました。施設内の清潔さ臭いのなさに驚きました。掃除のゆきとどいた清潔さです。ボランティアの方が多いいのにも驚かされました。三週間のコースの間寮母さん達のお世話ぶり、嫌な顔一つせず後始末をし明るく父の話相手をしてくださるのです。一時間かかる食事も速かになりました。そのあともデイケアのお世話になり仲間と笑顔で話している父の姿に感謝しています。こうした施設があまりに少く、人間の最後の生まで金もうけの対象にしてしまう日本の現状を考えると、父がいるだけに嘆かずにはいられません。あしたかホームのお世話にはただただ感謝であります。」

6、在宅要援護老人地域ケア事業

なによりの独自性のある事業は、沼津市在宅要援護老人地域ケア事業である。法人の独自の事業展開に注目した日本生命財団が助成するので地域ぐるみの在宅の要援護老人のケアネットワークづくりを提案してきたのである。現理事長三義氏のすぐれた調整活動がはじまる。地元の関係課（社会課、福祉老人課、健康管理課）市社会福祉協議会、市民生委員協議会、沼津保健所等関係機関代表があしたかホームをキーステーションとしてつどい地域ケア推進会議が開かれる。これまで関係機関の横のつながりがなく、保健師やヘルパーが同じ日に同じ老人宅を訪ねるなどの無駄がおこっていた。これらをより効果的な在宅ケアシステムにつなげるため協力しようというとりくみである。具体的には

- ①福祉、保健、医療の各種サービスを総合的に提供するため、統一性のある「社会サービス票」を作成する。
- ②各関係機関の実務者会議を構成し調査研究と同時に総合性あるサービス提供を図る。
- ③地域婦人らの介護セミナーを充実し、民生委員やボランティアが一体となつての福祉実践活動ができるシステムの構築
- ④各地域のデイサービスや介護ホームを拠点整備しセミナー修了者等によるサービス地域集中援護方式を工夫する
- ⑤ネットワークをもとに住民のためのトータルケア体制を確立するという内容である。この事業の成果はのちに三義理事長が代表して

全国的な集会において発表され話題の主となったのである。又この事業をとし沼津市の公民関係機関の横のつながりが保たれ共通の老人台帳も活用されて在宅サービスの網の目が最も豊かな地域と評価されるにいたっている。法人の先駆的とりくみが輪をひろげ自治体をもくみこんだネットワークができ、その核のところに法人が位置づけられるたしかな花を咲かせたのである。

7、特別養護老人ホームと在宅サービス

(1) あしたかホーム

法人の最初のとりくみである特別養護老人ホームあしたかホームは石川さんのまさに私財を投じて創設されたのが昭和52年4月1日50床ではじまり、55年に増床して百床となる。地元沼津市から大半の入所者をむかえ近隣の県東部市町村からの人達が生活をしており介護度4と5の方が大半、2つ以上の疾病を有している。認知症の認定をうけている者79名。在所5年から10年の方が最も多いのが概況である。

あしたかホームには先にあげた施設、在宅サービスにあわせて

①原高齢者福祉センター

沼津市原一二〇〇、三に所在。一日35名のデイサービスにあわせ訪問介護などの在宅サービス事業を平成10年4月から実施。

②はら駅南デイサービス

沼津市原二七七に所在。一人10名のデイサービスを平成14年6月

より実施している。

を沼津市の委託で運営している。

このホーム開設と同時に先にあげたような在宅福祉サービスを公的補助のない時に積極的にとりくみ、地域住民の支援協力の輪もひろがる実績をみて県東部の市町村から施設の委託をうけることになるのである。

(2)伊豆中央ケアセンター

伊豆市大野三〇四に所在。一九九四年に旧修善寺町ら三町から建設委託をうけて開設。定員70名の大半が三町が合併した伊豆市の利用者である。認知症のもの55名という重度者の内容である。地域の方々の協力参加もさかんでデイサービス35名ショート20名のうけいれのほか配食サービス、在宅介護支援センターや訪問介護の在宅サービスも実施している。加えて地域自治体の要請をうけ次のような在宅サービスも併せて実施しているのが特長である。

①中伊豆ふれあいデイサービスセンター

伊豆市八幡三三ノ一に所在。定員30名。平成11年4月から開所している。

②天城デイサービスセンター

伊豆市市山五五〇に所在。定員30名。平成12年4月から開所運営している。

③中伊豆放課後児童クラブ

伊豆市八幡三三ノ一に所在。定員35名。平成12年4月から運営している。

④天城湯ヶ島放課後児童クラブ

伊豆市湯ヶ島一六一の一に所在。定員30名。平成15年4月から運営。

このように実践の評価としての地域自治体からの受託事業が特養ホームとあわせて展開されている。

(3) ぬくもりの里

伊豆の国市田京一二五九の二九に所在。一九九五年に旧大仁町ら三町から建設委託をうけ開設。定員70名。大半が旧三町からの利用者である。認知症のもの39名。要介護らが30名。旧大仁町、韭山町、長岡町が合併し伊豆の国市となり前者と同様地域自治体と住民から信頼と協力をえての運営状況とみうけられるのである。在宅サービスとしてのデイサービスは40名ショートは20名の受入れである。在宅介護支援センターや訪問介護にあわせて配食サービスや訪問介護員の養成などにもとりくんでいる。加えて地元の要請をうけて

①水昌苑生きがいデイサービスを実施。

所在は伊豆の国市大仁七四ノ八。自然温泉付のサービスを平成12年4月から運営にあたっている。

(4)みはるの丘浮島

沼津市平沼九二九ノ一に所在。二〇〇四年四月に沼津市の委託をうけての開所。特別養護老人ホーム80名。軽費老人ホーム10名の定員である。加えてデイサービス40名ショート16名のお世話をするほか、在宅介護支援センター、訪問介護などの在宅サービスを行っている。三義理事長の案内で見学させていただいたが入所中のどの利用者も親しいあいさつをし『変りないか』の理事長のよびかけに笑顔でうなづいているのである。地元沼津市の方がほとんどということをおいても日ごろの交流の豊かさがうかがわれるのである。ボランティアでみえている地域の婦人も『いずれここにお世話になりたい』と力をこめて語るのが印象的であった。ボランティアと家族面会をあわせて月に五百名をこえる地域の人々が来園していると記録されている。

8、障害者等の施設運営

高齢者関連以外の福祉事業でも多くの事業を受託運営している。その主なものは

①重度障害児者生活訓練ホーム沼津虹の家

沼津市志下中通五七一に所在。平成4年4月の開所。登録16名。一日平均八名の利用。

②知的障害児者デイサービスセンターおおばの家

伊豆の国市田京一二五九ノ二九三の所在。平成9年4月に開所。

登録25名、一日平均利用15名。地域ボランティアの参加が多い。

③救護施設沼津市高尾園

沼津市足高一五六ノ一に所在。平成14年に沼津市から運営委託。利用者80名は精神障害者55%知的障害者31%身体障害者14%の内訳である。利用者の声をうけとめ多様な催し物を企画、地域小学校との訪問交流など開かれた施設の運営につとめ民間法人としてのサービス充実につとめている。尚この園の開設は昭和36年という歴史を有している。

〈おわりに〉

石川さんが信念をもって心をこめて富士山のふもとにまいた種「あしたかホーム」がたくさんの地域の人々の協力をえて日を重ねるほどに多様な事業展開をみている流れをみてきた。いま静岡県東部における社会福祉法人の雄とし評価されている。現理事長三義氏が父の志を大切に守り実践につないだ成果であるといえよう。石川さんの人間的魅力と無私の奉仕の精神と実践が多くの人々の心をひきつけてたしかな事業展開をみたこと。その実績を評価する周辺自治体からの事業委託が加わり県内でも有数の事業規模となつていくことはすばらしいことである。その法人運営の根底に「春風会」の名にあらわされている地域福祉のためにつとめようと考える方、創業者としての石川さんの信念が息づいていることを評価したい。そしてその実践のもとにある法華信仰の熱心な在家信者としてのお

もいが深くかわることに注目したのである。はじめにあげたように介護保険法の導入により企業参入が規制緩和のスローガンのもととめられた今日である。独占的役割を福祉事業運営なかではたしてきた社会福祉法人がその存在意義を問はれる時をむかえていく。このことを重くうけとめて戦後六十年のあゆみを自己点検をきびしく行い、明日の日本のなかで尚たしかな評価を得ていくために心をあらたにして努力することがもとめられているものと認識したい。とするならば法人としてよつて立つ理念、外にむけてもたしかな言葉で語れる利用者本位の経営にあたらんとする信念ともいえる情熱をこめたおもいをきちんと表明できることが法人のトップにもとめられる本質であるといえるのではないか。三義理事長があげるような企業にはできないサービスはこれだと国民に鮮明に示せる心のあたたかさ豊かさのようなものである。周囲の人がその心に共鳴し自分も協力参加しようと思うようなたしかなもの、それを石川さんは見事に己の行いをとおして実行してみせてくれたのであると考える。そしてその父のおもいを継いで前にすすむ三義理事長の主張にも大いに共鳴するものを感じるのである。この見事な継承をさらに次の世代につなげこともふくめてこれからの春風会のあゆみに期待したいところである。その継承される柱の一つが石川さんをささえた法華の信仰であることにも関係ある方々には理解を願いたいところである。そう希望したいとペンをとつたものである。

私ことになるが身延山大学佛教学部に籍をおかせていただいて豊

かな時間に恵まれたことに感謝している。このキャンパスのなかで僧となる学習と訓練にいそむ若い人々に福祉につよいお坊さんになつてほしい、とよびかけてきた。そのもとは福祉に長くかかわった身でおもうことがある。公的福祉施設中心の福祉の世界から地域福祉を基におく民間社会福祉事業に主役が期待される流れにあることを思うのである。その民間福祉の主役は社会福祉法人であるはずである。ならばその福祉法人には石川さんのような信念がたしかなものとしてあることがもとめられる。でなければ地域の人々は参加してこない。地域の人の支持のないところ民間福祉は成り立たないのである。公的財源に寄生するだけの福祉法人はいずれ存在意義を失うであらうといたい。

地域の人々が民間福祉に己の問題として協力するためには地域の人材がもとめられる。そのキーマンに福祉を学んだ僧侶の方々に期待できないか、この問題意識がいつも頭にあってのとりくみであった。仏教福祉という名をこうしたとくりくみにます冠したい。さらに福祉にたずさわる方に良いサービス提供者たるためには仏教の心を大事にもつていただくことがのぞましい。この福祉人材養成の部分が一つ目の仏教福祉のねらいといつてよいのではないか。仏教の人にも福祉の人にも石川さんの実践を参考にさせていただいて明日の日本が長生きして良かったといえる社会になるための力にそれぞれの立場で意を用いてほしい、という願望が本稿をとりあげようとした根のところにあることを申しあげてペンをおきたい。

〔引用文献〕

〔注1〕 社会福祉法人春風会20年の歩み・平成8年・社会福祉法人春風会刊

〔注2〕 社会福祉法人春風会広報誌はるかぜ・平成17年2月24日号・第18号

〔注3〕 注1に同じ

〔注4〕 注2に同じ

〔注5〕 「ぼけ」に挑む―介護と医療のはざま―昭和63年・静岡新聞社刊

〔注6〕 さわやかな風のように心に届く福祉―春風会・平成17年・社会福祉法人春風会刊

社法人春風会刊

〔注7〕 介護保険施設の経営戦略―その理論と実践―平成12年・中央法規出版刊

規出版刊

〔注8〕 あしたかホームの事業概要・平成2年・社会福祉法人春風会刊

〔注9〕 老人問題現場で体験・特養ホームで宿泊研修・静岡新聞昭60・11・20号

以上に引用した文献の外、法人の多くの内部資料を参考にさせていただいた。三義理事長の好意に感謝したい

【キーワード】

社会福祉法人

経営理念と仏教

地域福祉の拠点としての施設